

アッシャー家の崩壊

エドガー・アラン・ポー

彼の心は吊るしたリユート。
触れればたちまち響く。

ド・ベランジェ

その年の秋のことである。雲は息苦しいほど低く垂れ込め、陰鬱で暗く、ひっそりとした一日中、私は馬に乗り、格別暗澹たる地方を独り通り抜けていた。やがて夕闇も迫る頃、物憂いアッシャーの屋敷がようやく見えてきた。どうしてか分からないが——その建物を一目見た途端、憂鬱が魂を覆い、嫌でたまらなくなった。たまらないというのは気の晴れるところはどこにもないのである。詩情に助けられて半ば愉快を覚えるような趣があり、心は寂しいものや恐ろしいものの峻厳なる自然のイメージにさえそれを抱くのが普通であるのに、この眼前の光景——一個の屋敷と、その敷地の地味な景観——荒涼たる壁——瞳のように虚ろ

な窓——毒々しい数株の萱、^{すげ}朽ち木の白い幹の数々を眺めていると、魂の底から押しつぶされるように感じた。この世のものに例えるとすれば、アヘンにふけた寢覚めの夢——日常への苦い帰還——ヴェールが見るも恐ろしく剥がれ落ちる瞬間——に最も近いだろう。心は氷のように冷たく沈み込み、吐き気がした——いかに想像を刺激してみても崇高なものに変わることはなく、暗澹たる思いを癒やし難かった。どうしたことだろう——私はしばらく考えた——アッシャーの家を眺めているとこれほど弱り果ててしまうのはどうしたことか。解し難い謎であり、思案するうち押し寄せてくる漠たる空想と闘うこともできなかった。こんな不満足な結論に結局は頼らざるを得なかった。これほどの影響を与える力がごく単純な自然物の組み合わせのどこかにあることは確かに疑うべくもないが、その力を分析することは理解を超えた領域にあるのだと。おそらく、この光景の要素、景観の細部を少し配置転換してみるだけで、悲しげな印象を弱め、あるいは絶つことも可能であろうと思われる。この考えに従い、黒い沼が屋敷の脇で静かにぎらついているその上の険峻な崖の縁まで馬を進め——以前にも増して身震いするような戦慄を覚えながらつくづく眺め下ろすと——灰色の萱や、^{すげ}気味の悪い木の幹、瞳のように虚ろな窓が逆さまに改まり、浮かび上がった。

それでいて、憂鬱なこの屋敷に数週間も滞在することを私は今や心に決めていた。家主のロデリック・アッシャーは幼少期の遊び仲間の一人であったが、最後に会ってからはもう何年も経過していた。ところが最近、遠方にいた私に手紙が届いた——彼からの手紙である——

—その手紙はむやみにしつこい性質ゆえに直接の返答しか許されないようなものであった。筆跡は神経の動揺を物語っていた。書き手は急性の肉体的疾患——自分を圧迫している精神障害——そして、最良にして唯一の親友である私に会いたいという真剣な願いについて述べていた。私との楽しい付き合いを病中の慰藉にしようというのである。内容以上のものを語っているその文体——彼の願いに込められている心の明らかさ——が私に躊躇の余地を与えなかった。その招きは初めからひどく奇妙に思われたが、私は直ちに応じたのである。

少年時代は親密な仲であったにもかかわらず、この友人について知っていることはほとんどないといってよかった。彼はいつも過剰なまでに隠し立てするのが癖だったのである。それでも次のことは承知していた。特有の感受性を備えたその氣質により彼の家系は非常に古くから知られていた。その氣質は長い歳月を通じて数多くの崇高な芸術作品の中に表れており、近年では出過ぎないながらも惜しみなく繰り返す慈善事業の中にも顕著であった。音楽理論においては錯雑した領域にまで情熱を傾け、その傾倒ぶりはおそらく、正統で容易に認識できる美しさに対する以上であつた。さらに驚くべき事実として、この由緒あるアッシャーの家系から生じた分家はいずれの時代にも持続することがなかった。言い換えれば一族は直系のみであり、ごく些細で一時的な変動を除いて常にそうであつた。きつとこの不在のためであろう——この敷地の特徴が、この一族の特徴と信じられているものと完璧に一致していることを考え合わせた上で、長い歳月の間に一方が他方に及ぼしたかもしれない影響

について憶測を巡らせるならば——傍系の後継者が不在であり、結果として父から子へ一貫して財産と家名が継承されてきたが故に、地所と一族がついに同一視されることになり、この屋敷にあった本来の呼称もやがて「アッシャーの家」という、古風で、どうとでも取れるような名称に融合してしまったのであろう——この名称を用いる農民の心の中では一族と一族の邸宅との両方がそこに包含されていたのである。

先に述べた通り、あのやや子供じみた実験——沼の底を覗き込んでみる行為——のもたらした唯一の効果といつてはただ最初の奇妙な印象がさらに強まっただけであつた。疑うべくもないことだが、自分がこの迷信——とそう呼ぶべきではなからうか——に急速にとらわれつつあることを自覚するが故にますますとらわれていったのである。そんな一見奇怪な法則が、恐怖に基づいた感情にはあるものだと私はかねてより知っていた。そしておそらくそれだけの理由で、池に映つた屋敷から屋敷そのものへ再び視線を上げた際にある奇妙な空想が心に芽生えた——実に滑稽な空想だったのにそれをここに述べようとするのはその感覚が私を圧倒した鮮烈な力を示すためである。想像力を駆使した挙げ句、この屋敷と敷地には特有の気が辺り一面に漂っているものと私は本当に信じ込んでいた——天の空気とは縁もゆかりもない、朽ちた木々や灰色の壁、静かな沼から発した臭気——神秘的で鈍く重苦しくかすかにそれと見分けられるような鉛色の瘴気である。

そんな夢のようなことは頭から振り払つてしまい、建物の現実の姿をもっと注意深く観察

してみた。主な特徴は過剰なほど古びて見えることであつた。累代の変色も甚だしく、微細な菌類が外壁を一面に覆い、軒からも糸のように細く絡み合つて網状に垂れていた。けれどもおびただしい荒廃ではない。石積みはどの部分も崩れ落ちておらず、部分部分は依然として完璧に組み合わさつており、個々の石材が崩れかかっていることとの間に奇妙な齟齬を感じさせた。思い起こされるのは外気の擾乱を絶つて放置されている地下室の中で長年朽ちるに任されていた古い木工品が体裁だけは一体性を保っている様子である。しかし、広範囲にわたる腐朽の兆候を除けば建物自体に不安定さの印はほとんど見られなかつた。穴の開くほど観察する人があればひよつとして、建物正面の屋根から延び、壁面をジグザグに下つて沼の無愛想な水面にやがて消えていく微妙な亀裂を発見できたかもしれない。

こんなことに気をつけながら屋敷に向かつて短い土手道を渡つた。待機していた使用人に馬を引き取られ、玄関のゴシック様式の拱門をくぐつた。そこから主人のアトリエまでは忍び足の侍者に無言で先導され、暗い入り組んだ通路を幾つも歩いた。どういうわけか、道中で目にした多くのものも一役買つて、先に述べた漠然たる感情が強まつていった。周囲の物——天井の彫刻、壁掛けのくすんだつづれ織り、黒檀のような色の床、歩くとガタガタ音を立てる幻灯のような紋付きの武具飾り、いずれも幼い頃から慣れ親しんだもの、あるいはそれに類するものに過ぎなかつた——それらがどれほど身近なものだったかは認めるのに躊躇しない——そんな平凡な光景がそれでも呼び起こす空想の異質さに驚かされた。階段では出

入りの医者に出会った。卑しい狡猾さと当惑の入り混じった表情が顔つきに浮かんでいるように思えた。彼は狼狽しつつも私に声をかけて通り過ぎた。侍者がやがて扉を大きく開け、主人の前まで私を案内した。

部屋に入ってみると非常に広く、天井も高かった。窓は細長く尖った形状で、檜材の床からあまりに遠く離れているので内からは全く手が届かない。格子窓のガラスから差し入って真紅に染まった微弱な明滅も目に立つ物体を浮かび上がらせるには十分であった。しかし視線を部屋の反対側の隅や、紋様を施してある円天井の奥の方まで届かせようとかがいてみても徒労に終わった。壁には色の濃い織物が垂れ下がっていた。家具は全体に多過ぎ、使い心地も悪く、ぼろぼろに古びていた。書籍や楽器が多く散らばっていたが、この光景に生命を与えてはいなかった。私は悲しみの空気を吸い込んでるように感じた。厳しく深く済度し難い憂鬱がすべてを覆い尽くしていた。

入った時、アッシャーはソファにごろりと横たわっていたが、立ち上がって快活な温かさで私を迎えた。その温かさは最初、過ぎた心遣いのように――世慣れて退屈した男のわざとらしい努力のようにも思えた。しかし、彼の顔つきを一目見ただけで、全く誠実さから来たものであるのがわかった。私たちは腰を下ろした。彼が口を開かないでいる間、哀れみと畏敬の念が入り混じった気持ちで私は彼をつくづくと眺めた。このロデリック・アッシャーほどこれほど短期間に恐ろしく変化した人間はかつてなかったに違いない！ 目の前にいる男

が幼少期の友人と同一人物であると認めるのに私は苦勞した。しかしその顔立ちはや元より非凡なものであった。死人のように青い肌、比類なく大きく潤み、光を発している瞳、やや薄くくすんではいるが、優れて美しい曲線を描いた唇、ヘブライ風の繊細な鼻筋ながらもその型としては珍しい広い鼻孔。顎は優美な造りをしていたが、突出の少なさは精神的なエネルギ―の欠如を物語っていた。髪は蜘蛛の糸のように柔らかで細かった——これらの特徴に加え、頭の鉢の法外に広いのが相まって忘れがたい顔つきを形作っていたのである。元々その顔を占めていた特徴と、そこから伝わってくる表情があり、今はそれが誇張されただけであるのに、その誇張の中にあまりに多くの変化が潜んでいたため、話しているのが誰なのか疑われたほどであった。気味悪く青ざめてしまった肌と、不可思議な輝きを放ちつつある瞳とが何より私を驚かせ、畏れさせもした。絹のような髪は伸び放題のまま顧みられず、蜘蛛の巣のように乱れた質感で顔の周りに垂れるというよりは漂うように広がっていた。いくら努力してみても素朴な人間性の概念がその奇抜な表情に結びつくことはなかった。

友人の様子を見て私はすぐにその脈絡のなさ——ちぐはぐさに気がついた。しかし、びくする癖——神経の過剰な動揺——を克服するための微弱で無益なものがきに起因していることにもすぐ気がついた。こんな性質はあの手紙からも確かに予期されることではあり、少年時代の特性を思い起こしても推測され、あの特有の身体構造や気質からも結論づけられることであった。彼の行動は快活と無愛想を交互に行き来していた。声は急に変化してある時

は震え、ためらい、（動物的な活気がいったん完全に失われ）またある時はある種の力強い簡潔さを持ち——重たく、唐突だが急ぐわけでもなく、籠もったような発声——つまり、鈍いが、おのずから均衡を保って完璧に調律された喉音になった。救いようなない飲んだくれや矯正不能なアヘン中毒者の興奮が最高潮に達している段階に認められる声であった。

そんな調子で彼が語ってくれたのは私に訪問してもらった目的であった。私に会えないかと真剣に願ひ、私からの慰めを期待していたのだという。また、自ら考える自身の病苦の性質についてもかなり詳しく述べてくれた。それは代々の体質的な病であり、治療法は見つかると望みもないと彼は言った——しかし神経性の病に過ぎず、たちまち治ってしまうに違いないともすぐに付け加えた。それは数多くの妖しい感覚として現れていた。詳細に語ってくれた感覚のいくつかは興味を引きつつも私を戸惑わせた。おそらくは表現や語り口全体の調子も影響していたことであろう。彼をひどく苦しめていたのは病的な感覚過敏であった。口にはごく淡白な食物しか受け付けない。衣服は特定の質感のものしか着られない。いかなる花の芳香も息苦しい。目はかすかな光にも痛む。そうして、恐怖を抱かせない音といつてはある特殊な、それも弦楽器から発せられる音だけだったのである。

ある種の変則的な恐怖のとりこになって彼は苦しんでいた。彼はこう言うのであった。「この嘆かわしい馬鹿馬鹿しさのうちに私は死ぬ。きつと死んでしまうでしょう。こうして、こうして、他でもなくこのようにして私は滅びます。私が恐れているのは将来起きるであろ

う出来事それ自体ではありません。その結果を恐れているのです。どんな些細な出来事であれ、これほど耐え難く魂が動揺しているまたその上に作用することを考えると身震いがします。危険そのものを憎悪しているのではないことは確かです。ただその純然たる現れ——恐怖を憎んでいるのです。こんな弱った哀れむべき状態にあって私はこう感じます。《恐れ》というむごい幻影との闘いの中で、生命と理性を同時に放棄せざるを得なくなる時がいつか必ず来るでしょう」

さらに、断片的でどうとでも取れるような彼の示唆を通してその精神状態のもう一つの奇妙な特徴を時折知ることができた。長年にわたり一度もあえて離れようとしなかったこの住まいにまつわるある迷信的な印象に彼は桎梏されていたのである——この住まいが持つという架空の影響力を伝える彼の言葉は再述しようにもあまりに漠然としていた——しかしその影響は家屋の形式と内容のうちに存在する特性を長年黙殺してきたことによりついに精神的にまで及んでいたのである——灰色の壁や塔、それらすべてから覗き込まれる薄暗い沼の物理的構造がついに彼の実存の精神に及ぼした効果であった。

ところで彼がためらいながらも認めたことがある。彼を苦しめる特殊な憂鬱はその多くがもっと自然で遙かに明白な起源を持っていた——長年連れ添った唯一の伴侶であり、この世で最後にして唯一の親族でもある、彼が深く愛した妹の重篤かつ長期にわたる病——いや、明らかに迫りつつある終焉がそれであった。決して忘れることのできない苦々しさをもって

彼はこう言った。「あれが逝ってしまえばこの男（絶望して虚弱なこの男）がアッシャー家の古い血筋の最後の者になってしまふ」彼がそう話している間、マデリン嬢（と呼ばれているこの妹）が部屋奥の方をゆっくりと通り過ぎ、私の存在に気づくこともなく姿を消した。驚いて私は彼女を見つめたが、驚きのうちに恐怖も混じっていなくはなかった。そうして、その感情の理由を説明することもできなかった。去りゆく跡を目で追ううちに感覚の鈍麻が私を圧した。扉がついに彼女を隔てて閉じた時、私は兄の方を一瞥してその顔つきを本能的に、かつ切実に探ろうとした。だが彼は両手で顔を覆い隠していた。痩せ衰えた指の間から熱い涙が滴っており、その指が並外れて生白く見えただけであつた。

マデリン嬢の病状には手腕ある医師たちも長らく困惑してきた。無氣力が持続し、身体が徐々に衰弱し、部分的な強硬症を伴った一過性ながら頻繁な発作が起こるといふのがその特異な診断であつた。その時点ではまだ病苦の重圧にも耐え、寝たきりにはなっていなかった。ところが、この家に到着した日の闇も迫る頃（言い表し難い動揺ぶりで兄がその夜、私に語つたところによれば）破壊者の力に彼女は倒れ伏した。彼女を垣間見たあの瞬間がおそらく最後になるであろう——この婦人を少なくとも生きている間に再び目にすることはあるまいと私は悟つたのである。

その後数日は彼女の名前をアッシャーも私も口にしなかった。その間、友人の憂さを晴らすべく真剣に努めて私は忙しかった。共に絵を描き、読書をし、あるいは彼のギターが鳴ら

す奔放な即興に夢心地で耳を傾けた。こうして彼の精神の奥底まで腹藏なく招き入れられるほどに親密の度を深めるにつれ、ますます痛切に私は悟った。精神界と物質界のあらゆる対象に憂鬱を注ぐべく、あたかも彼生来の積極的性質であるかのように暗闇を絶えず放射している、まさにその源であるこの心を慰めようといかに試みたところで無益である。

アッシャー家の主人とこうして二人きりで過ごした多くの厳粛な時間を私はいつまでも心に刻み続けるだろう。しかし、彼が私を巻き込み、あるいは導こうとした研究や活動の正確な性質を伝える試みはいかにしても失敗に終わるだろう。興奮して狂いに狂った観念性がすべてに硫黄のような輝きを投げかけていた。即興の長い哀歌はこの耳に永遠に響き続けるだろう。とりわけ痛々しいほど覚えているのはフォン・ヴェーバーの最後のワルツの荒々しい曲調を奇妙にひずませ、誇張して表現したものであった。また、精巧な幻想に覆われて一筆ごとに空漠の度を増していく彼の絵画には理由もわからず身震いし、それだけになおぞっとした。その絵画（イメージは今も鮮やかに目に浮かぶ）から何かを引き出そうとしても言語の範疇にあるごく一部の表現を除けば無駄になろう。極めてシンプルで飾らない構図により彼は人の注意を引きつけ、呑み込んだ。もし人間が観念そのものを描いたことがあるとすればその人間はロデリック・アッシャーだった。少なくとも私の当時の状況ではこの心気症患者がキャンバスに投げかけた純粹な抽象は耐えられぬほどの畏怖の念を湧かせるものだった。フューゼリのように確かに燃え上がるようでもあまりに具体的すぎる夢想を眺めてはその影

すら感じないほどの畏怖であった。

この友人の幻灯のような着想の中にも抽象の精神をさほどしたたかに帯びていないものがあり、それなら言葉でかすかにでも表現し得る。非常に細長い矩形の地下室あるいはトンネルの内部を描いた小さな絵があった。側壁の丈は短く、滑らかで白く、継ぎ目も装飾もない。構図に附帯したいくつかの点のおかげでこの穴は地下の極端に深い位置にあるように見えた。広大な空間のどこにも出口は見当たらず、松明その他の人工的な光源も見えなかった。にもかかわらず強烈な光線がどこにも洪水のようにうねっており、全体が、気味の悪い場違いな輝きに浸っていた。

聴覚神経の病的な状態については先ほど述べた。この患者にとつて、弦楽器のもたらす特定の効果を除くとあらゆる音楽が耐えられないものになっていた。ギターという狭い範囲に閉じ籠もったことはその演奏に幻想的な性格を与えること大であったろう。しかし即興における火のような軽快さの方はそれだけでは説明がつかない。彼の狂おしい即興幻想曲の旋律もその歌詞も（韻を踏んだ即吟を添えることもまれではなかったのだ）きつと、いや實際、人為的な興奮が最大になった特定の瞬間にのみ認められると先に言った強烈な精神の落ち着きと集中の結果であった。そうした狂詩曲の一つの詞を私は容易に思い起こすことができる。これほど強く印象に残ったのもおそらく、その意味の奥底に神秘的に流れているアッシャーの自覚を（それも初めて）見たように思ったからである。玉座にある自分の高い理性がもう

よろめき始めているという彼の自覚を見たからである。その詩は「幽霊の宮殿」と題され、正確ではないにせよほぼ次のような内容であった――

一、

青々とした谷間には

善き天使たちが住まい、

美しくいかめしい宮殿が――

輝ける宮殿が――かつてそびえていた。

思惟の王の支配する地に――

そびえ立っていた！

熾天使が翼で覆った建造物にも

これほど美しいものはなかった。

二、

黄金色に輝いた旗が

屋根の上に漂うては垂れていた。

（これは——これはすべて——遠い昔、
はるか昔のこと）

そうして、そんな快い日に、

羽飾りのあるやつれた塁壁に沿って
戯れている優しい風のひとつひとつが、
翼を授けて香りを運んでいった。

三、

その幸福な谷にさまよえる者たちは
輝ける二つの窓越しに、

よく調律されたリュートの律に従って

音楽のように動いている霊たちを見た。

玉座の辺りに座し、

（紫の血統の者よ！）

栄光に恥じぬ威厳をまとう

その地の支配者をも見た。

四、

真珠とルビーの燃えるような

麗しき宮殿の扉から

流れ、流れ、流れ、

永遠にきらめきながら

一隊のエコーたちが現れた。

その甘い使命はただ、

比類なき美声で

彼らの王の機知と英知を歌うことだけだった。

五、

しかしその王の高き位を

悪しきものが悲しみの衣をまとうて攻め立てた。

（ああ、嘆かん。明日が

寂しい彼に訪れることは決してないのだから！）

そして、彼の住まいを取り巻いた

栄耀栄華も

今や、墓に入った古き時代の物語に過ぎず、

かすかに記憶されるのみ。

六、

その谷間に今いる旅人たちは

赤く照らされる窓越しに眺める。

巨大な姿が異様に動き、

調子外れの音に合わせて踊るのを。

一方、気味の悪い急流のように

青ざめた扉から、

見るも恐ろしい群衆が延々と押し出され、

笑いながら——しかし微笑むことはもはやない。

このバラッドから示唆を受けて二人が一筋の理路に導かれていったことをよく覚えている。そこで明らかになったアッシャーの意見にここで触れようとするのは斬新さのためではない（同様の考えを抱いた者は他にもいる）。あまり強情に彼が主張したためである。その意見の概略を述べれば、あらゆる植物には知覚力があるということだった。ところが彼の乱れた想像力の中でこの考えはより大胆な様相を帯び、特定の条件下では無機物界にも及ぶことになっていた。彼の抱いていた信念の全容や手放しの真剣さを表現する言葉は私にはない。しかもこの信念は先祖代々の家を形作る灰色の石と結びついていた（これは先にもほのめかし

た通りである）。その知覚の条件を成立させてきたのはこれらの石の配置方法——その配列の秩序であり、一面を覆う無数の菌類や、周囲に立つ朽ちた樹木の秩序であり——とりわけ、その配置が乱されることなく長い時を耐え、沼の静かな水面にも反復されていることなのだと彼は想像していた。その証拠——知覚の証拠——を示すかのように水面や壁の周囲にはゆっくりと、しかし確実に独自の気が凝縮されつつあるのだと彼は言った（その言葉には思わずびくりとさせられた）。そうしてその結果は、何世紀にもわたり彼の家族の運命を造り、今、私の目にしている彼——彼、そのものを作り上げたあの静かながらしつく恐ろしい影響力の中に表れているのだと彼は付け加えた。こんな見解にコメントは不要であるから一切述べないことにする。

我々の蔵書——この病人の精神世界の少なからぬ部分を長年形成してきた書物——はこの幻影的な性質と当然ながら厳密に一致したものであった。グレセの『ヴェルヴェール』と『シャルトルーズ』、マキャヴェッリの『ベルファゴール』、スヴェーデンボリの『天界と地獄』、ホルベアの『ニルス・クリムの地底旅行』、ロバート・フラッド、ヨハネス・アプ・インダギネ、ド・ラ・シャンブルの手相術書、ティークの『青き遠方への旅』、カンパネッラの『太陽の都』といった書物を我々は共に耽読した。ジローナのドミニコ会修道士エイメリクの菊判の『審問官規程』は特に愛読していた。また、古代アフリカのサテュロスやアイギパーンについてポンポニウス・メラが記したものを何時間も読みふけることもアッシャーに

はあった。しかし、極めて稀覯で奇妙な菊倍判ゴシック体書籍——忘れ去られた教会の手引書——『マインツ教会の式次第による死者のための徹夜禱』の閲読に彼の最大の喜びはあった。

荒々しい儀式について記すこの著作がこの心気症患者に及ぼすであろう影響を思わずにはいられなかった。ある晩のこと、マデリン嬢が亡くなったと彼は突然告げ、本館に数多くある地下室の一つに（埋葬前の）二週間、遺体を保存しておくつもりだと述べた。こんな奇妙な処置もその現世的な理由を示されてみると、自分には異議を唱える自由がないように感じられた。この兄は故人の病苦の特異性、医師陣の差し出がましい詮索、一族の墓地在辺鄙で危険な場所にあることなどを考慮してこの決断に至ったのだ（と彼は説明した）。この家に到着した日に階段で出会った人物の不気味な顔つきを思い返してみると、こんな用心も決して怪しむべきものではなく、よく言えば無害と考えられたので、反対する気は全然起こらなかったことも否定できない。

アッシャーに依頼され、私も彼を補佐して遺体安置の手配に当たった。納棺すると二人だけで地下の安置所へ運んだ。そこは（長らく閉じられていたため松明の炎も息苦しい空気に半ば消えてしまい、調査してみる隙もほとんどなかったが）狭くて湿気を帯びており、光を入れる手段も全くなかった。地下深く、本館の私の寝室の直下に位置していた。どうやら遠い封建時代にはキープとして最悪の用途に使われ、後世には火薬か、可燃性の高いその他の

物質の貯蔵庫として使われたらしく、その床の一部と、通ってきた長い拱門の内側全体に銅板が丁寧に張られていた。分厚い鉄製の扉も同様に保護されており、動かす際には巨大な重量ゆえに蝶番が異様に鋭くきしめるような音を立てた。

恐怖が辺りを領する中、架台の上に悲しむべき重荷を置き、まだねじで留めてない棺の蓋を少しだけ開けて主の顔を見た。兄と妹との驚くべき類似が今初めて私の注意を引いた。アッシャーはおそらく、私の思うところを察知して少しばかりの言葉をつぶやいた。故人と彼とは双子であり、ほとんど理解されない性質の交感が常に二人の間に存在していたことを私は知った。しかしわれわれはこの死者を一瞥するに留めた——見つめているのがはばかりれたからである。病によりこの女性はある種の絶頂に棺に入った。厳密な強硬性の疾病には常に見られる偽の微かな紅潮が胸と顔に残っていた。唇には不審にも微笑みが残り、死においてこれほど恐ろしいものはなかった。蓋を元に戻してしっかりと閉め、鉄の扉も固く閉ざすと、家の上層にあるほとんど同じくらい憂鬱な部屋へと骨折つて向かった。

そして今や深い悲しみのうちに幾日かが経過すると友人の精神障害の様相に明らかな変化が現れた。平常の態度は消え失せ、平常の活動は顧みられず忘れ去られた。焦ったように足取りも乱れ、目的もなく部屋から部屋を徘徊するようになった。顔色は一層気味悪く青ざめたと言いたいほどで——瞳の光は完全に失われた。声の哽れることがかつて時折あったが、それがなくなった代わりに、極度に恐れているように震えわななくのが彼の発声の常態に

なった。心が絶え間なく騒ぎ、何か息苦しい秘密に抑圧されていて、必要な勇気を奮い起こしてそのことを打ち明けようともがいているのではないかと思われる時も確かにあった。またある時は説明し難い気まぐれな狂気に彼の状態を帰着させざるを得なかった。何時間でも虚空を凝視し、深い集中を保った姿勢でいて、まるで想像上の音を聞いているように見えただけである。その状態が恐怖を呼び起こし——私にも伝染したのは当然だった。彼の奇妙でありながら強烈な迷信の荒々しい影響がゆつくりと、しかし確実に私にも忍び寄ってくるのが感じられた。

特に、マデリン嬢をキープに安置して七日か八日たった深夜、寢床についた時にそうした感情の全き力が痛感された。眠気は微塵も訪れず——更の闌けてゆくばかりであった。私を支配しにかかる神経過敏を理屈で振り払おうと苦闘した。この部屋の調度品が憂鬱なせいで——暗くぼろぼろの織物が心を乱すせいで、全てでなくとも多くはそのせいでこんなふうに感じるのだと信じるべく努めた。吹き荒れている嵐の息吹に責められ、織物は壁の上を行ったり来たり定まりなく揺れ動き、ベッドの装飾に擦れて苦しげに鳴いた。私の努力には効果がなかった。制し難い身震いが次第に全身を覆い、ついには全く理由のない恐怖が夢魔のように私の心臓を圧迫した。振り払おうと息を詰まらせ、もがくように枕の上に身をもたげ、部屋の中の深い闇を真剣に見つめながら——なぜそうしたかもわからず、ただ本能的な衝動に駆られ——嵐の合間に長い間隔を置いていずこよりか響いてくる低く不鮮明な音に耳を澄

ませた。訳の分からぬ、しかし耐え得べからざる強い恐怖に圧倒され、急いで衣服をまとうと（今夜はもう眠れないだろうと感じていた）、自分が陥った哀れむべき状態から脱しようとして自ら鼓舞し、部屋の中を行ったり来たり素早く歩き回った。

こんな調子で数回往復したところへ、傍らの階段から聞こえてくる軽やかな足音が私の注意を引いた。アッシャーのものとすぐに気がついた。直後、戸をとんとたたいて彼がランブを手にも部屋へ入って来た。顔色は相変わらず死人のように青ざめていたが——それ以上に目つきが狂ったように浮かれており——全身の態度からはヒステリーを抑えているのが明らかだった。その様子には肝をつぶしたが——長く耐えてきた孤独に比べれば何であれましだった。むしろ安堵して彼の存在を歓迎したほどである。

「見てないのかい？」しばらく黙って周囲を見回した後で彼は突然こう言った。「見てないのかい？——まあ待って！ 見せてあげよう」そう言いながらランブへ慎重に笠を掛ける。と窓の一つのもとへ急ぎ、嵐に向かって大きく押し開けた。

吹き込むはやてのたけり立つ怒りは足元から我々を持ち上げそうになった。こんな夜には確かに激しくも峻厳な美しさがあり、狂おしく奇妙な恐怖と美があった。つむじ風は明らかに我々の周囲に勢力を集めていた。風向きの変化は頻繁で、しかも激しかった。濃密な雲が（家の塔に迫るほど低く垂れ込め）四方からぶつかり合いながらも遠くへは消え去らず、疾走する生き物のようなその速度が感知された。それを感知することは雲の濃密さにも妨げら

れなかったのである——そうして月や星の光は微塵も見えず、稲妻の閃光もなかったといえるのに、巨大な塊となって激しく立ち騒いでいる水蒸気の底と、周囲の地上のありとあらゆる物体とが妖しい光に照らされていた。発散したガスが屋敷を包囲し、かすかに光っているのはつきりと見えていた。

「見ないで——もう見てはいけないよ！」私は身震いしながらアッシャーにこう言う窓から椅子の方へそっと、しかし強引に導いた。「こんな幻に君は狼狽しているようだけれど、さほど珍しくもない電気現象に過ぎない——あの沼の瘴氣に起因しているのは氣味が悪いかもしれないがね。窓を閉めよう——冷たい空氣は君の体に毒だ。ここに君のお氣に入りの物語がある。私が読むからお聞きなさい——そうしてこの恐ろしい夜を共に過ごそうじゃないか」

私が手に取った古書はランスロット・キャニング卿の『狂氣の悲恋』であった。ところで、それをアッシャーの愛読書と呼んだのはむしろ悲しげな冗談のつもりで、真剣ではなかったのである。なぜというに、高邁な精神的観念性を備えたこの友人の興味を引きそうなものなど、長たらくして創造性を欠いたこの無骨な書物の中にはありそうもなかったからである。ただ、手近にそれしかなかっただけのことだ。それでも私は曖昧な期待をもてあそんだ。この心氣症患者を今騒がせている興奮も（精神障害の歴史には同様の異常例が満ちていることだから）これほど極端に馬鹿らしいものを読み聞かせてやればかえって冷めてくれることが

あるかもしれない。彼がその物語の文句に耳を傾けた、あるいは耳を傾けたように見えたあの無理やりかき立てたような快活さから判断してよければこの計画の成功を喜んでよかったかもしれない。

物語のあの有名な場面に私は差し掛かっていた。主人公エセルレッドが隠者の住居へ穩便に立ち入ることを求めて叶わず、ついに力づくで突入しようとする場面である。ここで、物語の文句がこう続くことを思い出されたい。

「さてエセルレッド、生まれながら剛の者なるを、飲みたる酒に勢ひて心たけくぞなりぬれば、隠者のさがなき、頑ななるとは語り合はするに及ばず、肩に雨の落ちかかるを覚え、嵐の来たらんを恐るるに、たちまち棍棒取つて打ち下ろし、扉の板に籠手なるほどの隙（ひま）を作り出でたり。さて手を掛けてたくましく引こじろへば、乾きたる木の軋みつつ、割れて碎けて裂けて散り、うつほに響きて森ぞ震ひ渡れる」

この文の終わりのところで私ははっとして、読むのを一瞬やめた。（興奮した想像が私を欺いたのだと即座に結論づけはしたものの）こう私には思えたのである——屋敷の中の遙か遠くの方から耳に不分明に届いてくる音はランスロット卿が詳細に描写しているこの引き裂かれる音の反響ではあるまいかと。（確かにくぐもって鈍くはあるが）性質が完全に一致しているように思われたのである。偶然の一致、それぐらいしか私の注意を引いたものがないことは疑いようがない。窓のガタガタ鳴る音やますます激しくなる嵐の中に混じるその音自

体には私の興味を引いたり不安にさせたりする要素など何一つなかったのは確かだからだ。話を続けてこう言った。

「エセルレッドは益荒男にして、門の内に入るにさがなき隠者の影も見えねばいたく怒り驚きたり。さにあらず、恐ろしき竜の身に鱗の覆ひたる、炎のごとき舌を垂れ、金の大殿の床は銀敷きたるを守りて居たりけり。壁には鎗石の盾の輝きながら掛かれり。その上にかく記したり——

ここに入る者、征すべし。

竜を討つ者、盾を得ん。

エセルレッド、棍棒振り上げ、頭を打ちつれば、竜ぞ目の前に倒れ伏す。毒の息を吐き、恐ろしい荒々しう、耳を刺すごとく叫びたるこそ凄まじけれ。エセルレッド、心ならずも諸手に耳を覆はではえあらざりけり。かくまでの音いまだかつて聞かざりけり」

ここでまた急に読むのをやめた。今度は狂おしいほどの驚愕を覚えた——なぜなら、確かに、疑う余地もなくこの瞬間（どの方向から発せられたかは全く見当がつかなかったが）低く、遠くからのようで、しかし耳障りで長い極めて異様な金切り声かあるいはきしるような

音が聞こえてきたからである——伝奇作家の描写した竜の妖しい悲鳴として私の想像の魔法がすでに作り出したそれと全く同じ音であつた。

この二度目の奇異な偶然の一致が起こつたとき私は確かに相反した千の感覚に圧迫され、驚嘆と極度の恐怖に支配された。それでもなお十分に平静を保ち、この聞き手の神経過敏をいかなる発言によつても刺激しまいとした。彼もこの音に気づいているはずと確信していたわけでは決してない。とはいえ、確かにここ数分のうちに奇妙な変化がその態度に生じていた。私の方を向いて座つていた彼は少しずつ椅子を回転させて部屋扉に向かい合つていた。そのため顔立ちは部分的にしか見えなかつたが、唇のぶるぶる震えているのは確認できた。まるで、耳には聞こえぬつぶやきをしているかのようなのだつた。頭は胸の上に垂れていたが——横顔にちらりと見えた目が大きく固く見開かれていたので、眠っているのではないことは分かつた。体の動きも眠りとは矛盾していた——穏やかながらも絶え間なく均一に左右に揺れていたのである。これだけのことを素早く確認するとランスロット卿の物語を再開した。それはこのように続いた。

「今や益荒男、竜の怒りの恐るべきより逃るれば、鎧石の盾にかかりつるまじなひの解けたらんを思ひ出で、かばねの道に横たはるをのけ、殿の内なる銀しろかねの床ゆかを勇ましう進む。盾の壁にかかりたるに近づけば、至りつくをも待たずして盾は銀しろかねの床ゆかに落ち、足の下にいても恐ろしく鳴り響きけり」

その句が私の唇を離れるやいなや——まるで真鍮の盾がまさにその瞬間、銀の床に激しく落下したかのように——うつろで金属的な音ががらんがらんと、しかしくぐもったように響き渡るのがはつきり聞こえた。全く意気地無しのように私は飛び上がったが、アッシャーの規則正しい揺れは乱れなかった。彼の座っている椅子の方へ私は駆け寄った。彼の目は前方をじっと見つめ、顔つきは全体が石のような硬さに支配されていた。しかし、私が彼の肩に手を置いた瞬間、彼の全身を強い身震いが走り、萎えた笑みが唇の端を震わせた。そして、私の存在に気がつかないかのように、焦ったようにぶつぶつと、訳の分からないことを低く話しているのがわかったのである。身を乗り出して彼に近づくとその言葉の、聞くも恐ろしい意味がついに聞き取れた。

「聞こえない？ いや、私には聞こえる。聞こえていたんだ。ずっと——ずっと——ずっと——何分も何時間何日も聞こえていた——それでも私は——ああ、このろくでなしを憐れんでくれ！——それでも私は——それでも私は口に出す勇気がなかった！——あの棺に生きながら葬つてしまったのだ！——私の感覚は鋭いと言ったね。今こそ告げよう。あのうつろな棺の中で彼女がかすかに動き始めているのが聞こえたんだ。聞こえていたんだ——何日も何日も前から——それでも私は——私は口に出す勇気がなかった！——そして——今夜——エセルレッドね——ハ！——ハ！————隠者の扉が破れ、竜が死の叫びを上げ、盾ががらんがらんと鳴った！——いや、むしろ棺が裂け、牢獄の鉄の蝶番がきしり、地下室の銅張りの拱門

の中で彼女がもぐ音だったのだ！ ああ！ いずこへ逃げればよいのか。彼女はすぐにここへやって来るのではないか。軽率な私を責めようと急いでいるのではないか。階段で聞こえたのは彼女の足音だったのではないか。その心臓の重く恐ろしい鼓動が聞こえているのではないか。狂人め！——ここで彼は猛然と躍り上がり、魂を吐き出すようにけたたましい声を上げてこの句を言った——「狂人め！ 扉の向こうに今まさに立っていると云うのだ！」

まるでこの発話の超人的な精気に呪力が宿っていたかのように、彼が指さした古風で巨大な框扉が直ちに、しかしゆっくりと重々しく黒檀の口を開いた。実際にはやての仕業であつた——ところが扉の向こうにはマデリン・アッシャー嬢が、背の高い、経帷子に包まれた姿で確かに立っていた。白い衣には血が付いており、むごい格闘の痕を痩せ衰えた全身に残っていた。しばらくの間、戸口で震えながらよろしていたが——やがて低くうめくような叫び声をあげると兄の体の上へどさりと倒れ込んだ。そして激しい、今や最期の死苦の中で床の上に兄を押し倒し、死体に変えてしまった。彼は予期通り恐怖の犠牲者になったのである。

その部屋から、その屋敷から私は度を失って逃げ出した。嵐は古い土手道を渡る間もなお猛威を振るっていた。突然、道筋に沿って狂ったように光が走った。私は振り返り、その異様なきらめきがいずこより放たれたのかを確かめようとした。巨大な屋敷とその影くらしいか私の背後にはなかったからだ。光を発していたのは、沈みゆく、血のように赤い満月だっ

た。建物の屋根から基部までジグザグに伸びていると以前述べた、かつてはかろうじて見分け得たほどの亀裂を通して今や月が鮮烈に輝いていた。つくづくと眺めている間もこの亀裂は急速に広がり——つむじ風の激しい息吹が吹き抜け——月の輪の全体が視界に突然飛び込んできた——巨大な壁がどっと崩れるのを目にした瞬間、目眩がした——千の水の声が混じったような長く騒がしい叫びが響き渡り——足元の深く湿った沼が「アッシャー家」の残骸を無愛想に静かに飲み込んだ。